

(研究部門)

自ら学び思いや考えを伝えあうことのできる子どもの育成

～豊かな話し合いを目指した学習指導の工夫～

大阪市立鯉江東小学校

1. 研究主題設定の理由

昨年度より国語科の研究に取り組んでいる。昨年度は研究主題を「主体的に学び、思考力を育む国語科学習～読解力の向上を目指して～」と設定し、研究を進めた。令和4年度の経年調査において課題がみられた「情報の扱い方に関する事項」に関する教材を研究し、児童が国語科を楽しみながら学習できるように学習指導の研究を進めてきた。特に説明的文章の読解力を高めるための研究を中心に取り組んだ。多様な情報から必要なものを見つけたり、文章構成を理解したり、筆者の説明の仕方について読み取ったりするための力がついてきた。また、本校の児童の実態として、令和5年度の校内アンケートでは、「国語の授業はよくわかりますか。」の項目について、93.4%の児童が肯定的に回答している。大阪市小学校学力経年調査の結果では、「国語の勉強は好きですか。」の項目について、令和4年度では肯定的に回答する児童は60.3%だったが、令和5年度では、73.1%と向上した。前年度から国語科の学習に対する意欲の向上がみられてきている。しかし、少人数での活動の取り組みの中で、苦手意識の強い児童が、主体的に自分の考えをもち話し合いに参加することに課題がみられたり、自分の考えを言葉に表すことに課題がみられたりした。経年調査の結果からも、「話すこと・聞くこと」「話し合いの内容を読み取る」「漢字」「言葉の学習」においては大阪市平均より正答率が低い学年がみられた。そこで本年度は、「自ら学び思いや考えを伝えあうことのできる子どもの育成～豊かな話し合いを目指した学習指導の工夫～」と設定し、どの児童も豊かな話し合いができるようにするための研究を進めていくことにした。

2. 研究の趣旨

少人数での活動の取り組みの中で、苦手意識の強い児童が、主体的に自分の考えをもち話し合いに参加することに課題がみられたり、自分の考えを言葉に表すことに課題がみられる。経年調査の結果からも、「話すこと・聞くこと」「話し合いの内容を読み取る」「漢字」「言葉の学習」においては大阪市平均より正答率が低い学年がみられた。どの児童も豊かな話し合いができるように個別の学びと話し合い活動の充実を図るなど、研究を進めていく。また、協働的な教職員チームをテーマにもち全教員で協力して研究に取り組んでいく。

3. 研究の概要

研究主題にせまるため、研究の視点を以下のように設定した。

視点① 児童の主体的な学びを進める授業展開の工夫

授業展開の中で、児童が単元や本時のめあてを解決するように自ら進んで問題解決に取り組む、進んで表現しようとしていたか。

視点② 児童が対話的な学習活動から深い学びにつながる授業展開の工夫

児童同士や、児童と指導者との対話を通して、児童自身の考えに広がりや深まりが生まれたか。

視点③ 豊かな話し合いを目指した学習指導の工夫

児童が活発に話し合うことができるように、どのように発問や展開を工夫していくか。

4. 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

- 物語文や説明文の学習において一人学びの時間を確保することができた。説明文では、音読、意味調べ、意味段落ごとに分ける、まとまりごとに題名をつける、筆者が伝えたかったことを見つける、筆者が使っているわざを見つける、例をあげているところを見つけるなどを活動した。物語文では、音読、意味調べ、登場人物リストの作成、登場人物の気持ちを考える、物語の設定や山場を見つけるなどの活動をした。各学年の発達段階に応じて活動を変え、児童自ら選んで活動することを継続することができた。これにより、児童が自ら進んで文章に向き合う習慣がついてきた。
- 児童同士が話し合う場面を多く設定することができた。文章の中で考えられる問いに対して児童同士で話し合う時間を確保することにより、主体的に考えるようになってきた。
- 主体的に活動できるようにワークシートを各学年の実態に応じて工夫することができた。低学年では穴埋めのワークシートにして語彙の習得の差に対応したり、中学年では、本時で読み取る文章をワークシートに記すことで、問いと文章を結び付けやすいように工夫したりした。
- ICT を効果的に活用することができた。対話活動の際に、一人一台端末でポジショニングや発表ノートを活用して友だちの意見を確認したり、指導者が導入でパワーポイントを活用したりすることにより、視覚的に分かりやすい手立てとなった。
- 多様な意見が生まれる問いを設定するように意識した授業展開を行うことができた。児童それぞれに違った考えを表現できるように、正解が1つではない問いを考えた。思考のずれをつくることにより、より深い話し合いを生み出すことができてきた。
- 対話活動の方法を年間通して継続して指導することにより、自然と話し合いが生まれる環境を作ることができてきた。その際、多様な方法で対話活動を行った。各クラスの児童の実態によって、ペアやグループ、全体での話し合いなど多様な方法を学ぶことにより、どのような場面でも主体的に話し合う習慣が付き、より深い学びにつながっていった。

(2) 今後の課題

- めあてを明確にすること。児童が主体的に参加できる学習活動を展開するためには、児童の意見の幅が広がり交流がより活発になる目的が必要であった。
- 自分自身の考えをもつ時間の確保。進んで学習活動に取り組むために、自分の考えを明確にもつ必要があった。
- 登場人物の気持ちを考えるための動作化。登場人物の気持ちを考えるために、重要な動作に関して、低学年に限らず活動すること。
- グループ活動での人数の工夫。学習場面によってどのぐらいの人数だと深い学びにつながる対話となるのか考える必要があった。
- 自分の考えを伝えるための語彙力の向上。語彙力を伸ばすために国語タイムを設定し活動してきたが、その場に応じた語彙力が不足していることがあった。各学年に合った必要な語彙力の目標を設定し、必要な語彙を増やしていく必要がある。
- 一部の児童だけが発言する授業にならないようにする工夫。各学年の児童の実態にあった適切な発問により、だれもが考えられる場面も設定する必要があった。それぞれに役割をもつことができるようにしたり、間違ってもよいと感じる発言しやすい環境をつくったりすることが大切である。